

校則の見直し

岩手県立千厩高校

生徒主体の校則の見直しを通して、
「自分たちが学校をつくる」意識を高め、行動を促す

岩手県立千厩高校は2024年度、生徒会執行部が中心となり、校則の見直しに着手した。全校生徒を対象に実施したアンケートの結果を基に、生徒会執行部が改定案を作成。各クラスの代表者による代議委員会で議論を重ね、25年5月、身だしなみやスマートフォンの使用に関する校則が改定された。その経験は、「自分たちが学校をつくる」といった生徒の自治意識を高めるとともに、教師の指導観の変化にもつながった。

かつての同校で「あたり前」だったこと

- 1 校則は学校・教師がつくるものという生徒の認識。
- 2 学校をつくるのは教師。

「あたり前」を見直した経緯・きっかけ

- 1 校長が校則の見直しを提案。生徒会執行部が全校生徒を対象に、校則に関するアンケートを実施。
- 2 アンケート結果を基に、生徒会執行部が改定案を作成。それを土台に各クラスの代表者による代議委員会で何度も協議。

見直しの成果・今後の展望

- 1 生徒に「自分たちが学校をつくる」という意識が浸透。学校行事もよりよいものを目指し、各委員会での議論が活発に。
- 2 教師と生徒間の信頼感が高まり、教師の指導観が変化。生徒の主体性をより尊重するように。

自分で考える力を育て、
人権や多様性を意識させたい

「居心地のよい、ちょっとしたいい学校」の実現を目指し、学校の魅力化を推進する岩手県立千厩高校は、2025年5月に行われた生徒総会での全校生徒の承認を経て、校則の一部を改定した。改定したのは身だしなみとスマートフォンの使用に関する項目だ（P.18）。

生徒が校則を見直す活動を始めたのは、24年度に着任した熊谷道仁校長がその年の5月の生徒総会で、「君たちは今の校則に納得していますか。高校生が化粧や髪染め、アルバイトをしてもバイトに乗っても法律上は問題ありませんが、本校ではそれは校則で禁

止されています。それでよいのですか」と問いかけたことがきっかけだった。そのねらいを熊谷校長はこう説明する。

「本校の生徒は日頃から校則を守り、生徒指導上も大きな問題はありませんでした。だからこそ、校則の見直しを提案しました。そのねらいの1つは、何事もうのみにせず、疑問を持ち、自ら考える力を育むことです。規則をただ守るのではなく、規則がなぜあるのかを説明できるようになってほしいという思いがありました。さらに、人権を始めとする権利や多様性への生徒の意識を高めることも、ねらいの1つでした。世界的に人権意識が高まり、様々な背景や特性を持つ人々への理解が求められています。本来は多様性に富む集団



校長
熊谷道仁
くまがい・みちひと
同校に赴任して2年目。



生徒指導主事
林 苗子
はやし・なえこ
同校に赴任して7年目。
指導教諭。家庭科。



生徒指導課
飯塚 高
いづか・たかし
同校に赴任して4年目。
地理歴史・公民科（公民）。



生徒指導課
秋田浩介
あきた・こうすけ
同校に赴任して1年目。
保健体育科。



生徒指導課
菊池俊輔
きくち・しゅんすけ
同校に赴任して1年目。
保健体育科。

学校概要

設立 1902（明治35）年
形態 全日制／普通科・生産技術科・産業技術科／共学
生徒数 1学年約150人
2024年度卒業生進路実績 国公立大は、岩手大、茨城大、青森県立保健大、青森公立大、岩手県立大などに10人が合格。私立大は、盛岡大、東北学院大、東北工業大、東海大などに延べ22人が合格。短大・専門学校進学48人。就職83人。

であるはずの生徒全員がかかわり、身近で、しかし疑問も持たずに守っている校則を見直すことは、2つのねらいを達成する上で有効だと考えました」

アンケート結果から、議論の必要性に気づいた生徒たち

熊谷校長からの提案に対する生徒の反応は鈍く、生徒会執行部も戸惑った。当時の校則に特に不満や問題がなかったため、「校則を見直すと言われても、何をどうすればよいかわからない」と言ってきた生徒会執行部に対して熊谷校長は、「みんなが納得できる校則になっているのかを考えてみて」と伝えた。

生徒会執行部は話し合いの末、まずは全校生徒の意見を聞こうと、約450人の生徒を対象としたアンケートを実施。校則の主要項目の「整容」「スマートフォン」「アルバイト」「バイク」、そして校則全般について、「厳しくてよい、今のままでよい、緩めてほしい」の3段階で回答してもらうとともに、見直しに記入してもらった。すると、多くの項目で「今のままでよい」が5〜6割、緩めてほしい」が2〜3割となり、見直してほしい校則には、スマートフォンの使用や女子生徒の靴下などが上がった。

図 改定した校則、検討したが改定しなかった校則

■改定した校則

1. 身だしなみ

- 女子生徒の靴下：学校指定の靴下のほかに、紺色や黒色の靴下の着用を許可する。ただし、式典や校外学習の際には、学校指定の靴下を着用する。また、学校指定の靴下を所持していることを確認するため、身だしなみ点検時には学校指定の靴下を着用する。
- ジャージでの登下校：夏季の軽装期間は学校指定のジャージでの登下校を許可する。学校指定以外のジャージを着用しての登下校は認めない。

2. スマートフォンの使用

- スマートフォンの使用を登校時から清掃が終わるまで禁止することに変更はないが、使用可能な時間においては校舎内での使用を許可する。
- 学校行事においてはカメラ機能のみ、使用を許可する。ただし、個人情報の保護の観点から、校内で撮影した画像のSNSへのアップは禁止とする。それが守られなかった場合は、学校行事での撮影許可の特例は廃止とする。

■検討したが改定しなかった校則

1. アルバイト

- 高校生は学業に専念するという観点から、従来通り、特別な事情があり、学校に許可を得た場合以外は禁止とする。

2. バイク

- 交通安全の観点から、従来通り、使用できるのはスクーターのみとする。

※学校資料を基に編集部で作成。

での承認を経て、5月の生徒総会で議案を出し、全校生徒にも承認された。

自由を守るための規律 という視点で校則を考える

生徒会執行部が苦心したのは、自分たちが作成した改定案をどう伝えれば、全校生徒に納得してもらえるかという点だった。アンケートでは化粧やアルバイトなどを認めてほしいという意見が上がったが、生徒会執行部は「学校の秩序を守るものか」「千厩高校として恥ずかしいものか」といった観点で改定案を作成した。しかし、

「他の生徒も自分と同じように当時の校則には不満はないと思っていましたが、アンケートの結果、いろいろな意見があることが分かりました。学校全体で校則についてしっかり考えるべきだと思いました」（生徒会執行部）

10月の生徒総会では、アンケートの結果と生徒会執行部の見解を報告。見解については生徒会執行部と各クラスの代表者による代議委員会が協議し、その結果を各クラスで共有・議論を行った。そしてそこで出た意見を踏まえた代議委員会での協議を12、2、3月と繰り返し行い、25年3月に生徒会執行部が最終的な改定案を作成。職員会議



話を聞いた生徒会執行部。後列左から、熊谷颯汰さん、岩淵宇紘さん、小野寺湊士さん。前列左から、渋谷佳蓮さん、須藤彩音さん（全員3年生）。

生徒会執行部が改定しないと判断したのも、生徒が上げてくれた貴重な意見であることから、改定しないという判断をした理由をしっかりと説明しなくてはいけないと強く思い、どう説明をすればよいのか、頭を悩ませた。

その様子を見ていた生徒指導主事の林苗子先生は、一つひとつの意見について、それを認めたら学校がどのような状況になるか、生徒会執行部がイメージできるように支援した。

『その意見を認めたらどうなる？』などと問いかけると、生徒は「勉強がおろそかになりそう」「部活動の参加率が下がるかも」「地域の人や中学生からの評判が悪くなりそう」などと答えました。『それが改定しない理由になるんじゃない？』と伝えました（林先生）

生徒指導課は、学校・教師として認められない改定案を生徒会執行部が出した時の対応策を考えていたが、結果

としてそれを講ずることはなかった。

「熊谷校長は『自分たちの学校なのだから、自分たちでそのあり方を決められる、学校を変えられるんだよ』と繰り返し伝えていました。生徒会執行部も代議委員も、学校をよりよくするという自覚と責任感を持って話し合っていました」（林先生）

生徒会執行部は、「校則の意義について話し合い、私たちの間に『ルールは最低限の自由を守るためにある。自由を守るための規律という視点で校則を考える』という共通認識が生まれました。それを念頭に校則を改定した結果、以前よりもさらに居心地のよい学校になったと感じています」と語る。

生徒の議論が建設的に進むよう、教師が支援

生徒主体の校則の見直しが結果するよう、同校の教師は生徒を見守りつつ、励まし、助言してきた。生徒に伴走する意識は日々の活動にも広がり、教師と生徒の対話も増えた。それは、生徒の「先生は自分たちの話を聞いてくれる」という信頼感と、「自分たちが学校をつくる」という意識の醸成につながり、様々な活動が生徒主体となっている。その一例が、今年7月に行われたク

ラスマッチ（体育祭）だ。生徒会執行部と各クラスの代表者から成る実行委員会でクラスマッチの企画・運営について何度も議論を重ねた結果、「クラスの団結力を高める」という趣旨の下、前年度までの種目を一部変更し、開催期間も1日増やして3日間に決定した。

生徒の議論を見守った、生徒指導課の秋田浩介先生は次のように語る。

「各クラスの代表者は、自分のクラスから預かった意見を通そうと、時に一方的な発言をしました。そうした時だけは私が生徒の間に入って発言の趣旨を整理するなど、建設的な対話になるよう支援しましたが、それ以外は頼もしく思いながら議論を見ていました。生徒が学校行事をよりよくしようと、様々な角度から議論を重ねたのは、校則の見直しの経験が生きているからだと感じました」

多様性に目を向けた生徒の意識をさらに高めたい

一連の活動は教師の意識も変えている。生徒指導課の飯塚高先生は、部活動の指導を見直したと言った。

「生徒が校則を見直す姿を通して、生徒は普段何も言わなくても自分の考えを持っているのだと再認識しました」

その考えを表現し、主体的な行動へと結びつける力を、教師が育てていなかったのだと痛感させられました。その反省から、私は部活動で、活動時間のうちの30分〜1時間程度を、生徒が自分で練習内容を考えて実践する時間としました。生徒の成長に合わせてその時間を増やしていきたいと考えています」

今年度に着任した生徒指導課の菊池俊輔先生も、指導観が変わった。

「私は校則の改定は教師主導で行うものだと思っていましたが、生徒の力でもできるのだと実感し、考え方が変わりました。ただ、『最後は先生が何とかしてくれる』などとならないよう、教師は口を出したくなるのを我慢し、『これはあなたの仕事』と、生徒に責任を持たせることが重要だと感じています」

生徒主体の校則の見直しは、生徒自治が進むとともに、生徒や教師の固定観念を揺り動かす契機となった。熊谷校長は今後の方向性を次のように語る。

「生徒が触れている社会は狭いため、それを広げ、疑問を持つ意識を一層高めていきたいと考えています。今回、校則に対して様々な意見が出たことで、同じ学校の生徒でも多様なのだと生徒は意識し始めました。その意識をさらに高められるよう、地域に暮らす外国人とも連携した活動を検討しています」